広島芸術学会活動報告

二〇〇五年七月～二〇〇六年六月

米門公子

▼平成十七年七月八日（金）

第十九回総会・大会案内号を兼ねた会報第八十三号を発行。巻頭ページに七月二十三日に開催する総会・大会のスケジュールを発表。それに続き、四つの研究発表のレジュメ（執筆・各発表者）、シンポジウムの趣旨（執筆・菅村亨氏）および基調講演者とパネリスト三名のプロフィルを掲載した。

最終ページには第七十一回例会報告「直島　―地中美術館・家プロジェクト・ベネッセハウスへ―」（執筆・津島由里子氏）を載せた。

▼平成十六年七月二十三日（土）

第十九回総会・大会を広島県立美術館・地階講堂で開催した。

総会は午前九時三十分にスタート。進行役は大橋啓一事務局長が務めた。最初に金田晉代表委員が挨拶を述べた。続いて議事に入り、平成十六年度の事業報告を広島大学の青木孝夫氏、決算報告を大橋啓一事務局長が行った。監査報告は、倉橋清方、杉谷冨代の両氏が欠席のため、書面を大橋氏が代読した。いずれも総意で承認された。引き続き、平成十七年度事業計画を青木氏、予算案を大橋事務局長が発表し、そのまま承認された。今年は委員改選の年にあたっていることから、金田代表委員がそれぞれの候補者名を発表し、そのまま承認された。

【代表委員】金田晉　【委員】青木孝夫、井野口慧子、大井健地、大橋啓一、桑島秀樹、末永航、菅村亨、関村誠、高石勝、出原均、中畝みのり、原田佳子、伴谷晃二、樋口聡、松田弘、水島裕雅、吉井章　【年報編集委員長】青木孝夫　【年報編集委員】末永航、菅村亨、関村誠、樋口聡　【アドバイザー】安西信一、入野忠芳、長田年弘、国府寺司、幣原映智、高木茂登、寺本泰輔、永田雄次郎、八田典子、原田宏司、松本真　【監査】倉橋清方、杉谷冨代【事務

局長】大橋啓一【事務局書記】米門公子

続いて十時三十分から大会を開始、午前中に二つの研究発表、午後から二つの研究発表とシンポジウムを行った。

研究発表①広島女学院大学大学院 高橋千尋氏による「20世紀のアメリカ社会を描いたイラストレーター、ノーマン・ロックウェルのメッセージ」。第一次世界大戦、第二次世界大戦を挟み、アメリカが経済的、社会的に発展した時代に活躍したイラストレーター、ノーマン・ロックウェルの写実的イラストを通し、彼が作品に込めた願いや希望、また、彼がとらえたアメリカ社会、文化について考察した。

研究発表②広島大学大学院 上野仁氏の「アドルノ美学にみる教育理念とその現代性について」。「批判的身体」「和解的な身体」の獲得を理念とするアドルノの教育論の現代性を改めて提示した。

研究発表③エリザベト音楽大学 田中香月氏による「アレクサンドル三世の即位から革命までのロシアのピアノ・ソナタにおける特徴」。ロシアのアレクサンドル三世の即位からロシア革命までのピアノ・ソナタを取り上げ、ロシア独自の作曲技法や作風の特徴を浮き彫りにした。

研究発表④同志社大学大学院 河合貞子氏の「ドラクロアとショパンの作品構造における類似性の比較分析」。ほぼ同時期に完成されたドラクロアの「十字軍のコンスタンチノープル入城」とショパンの「24の前奏曲集作品28」を取り上げ、それらの比較による考察を展開した。

午後からはシンポジウム「芸術は闘えるか?」。詩人の御庄博実氏が「現代詩は生き残れるか」というタイトルで基調講演を行った後、パネリストに広島市現代美術館副館長の竹澤雄三氏、「広島に文学館を! 市民の会」事務局長の池田正彦氏、比治山大学現代文化学部助教授の高石勝氏を迎えて、シンポジウムを行った。司会は広島大学大学院教育学研究科の菅村亨氏が務めた。大会参加者は三十五名。終了後、発表者やパネリストを囲んで、懇親会を開催した。

▼平成十七年九月十五日（木）

会報第八十四号を発行。巻頭言は関村誠氏が「ベルギー人の顔」を執筆した。続いて広島芸術学会第十九回大会の報告を掲載した。研究発表①「20世紀のアメリカ社会を描いたイラストレーター、ノーマン・ロックウェルのメッセージ」（発表・高橋千尋氏、報告・広島大学大学院 川口佳子氏）②「アドルノ美学に見る教育理念とその現代性について」（発表・上野仁氏、報告・広島大学大学院尾形太郎氏）③「アレクサンドル三世の即位から革命までのロシアのピアノ・ソナタにおける特徴」（発表・田中香月氏、報告・エリザベト音楽大学非常勤講師 馬場有里子氏）④「ドラクロアとショパンの作品構造における類似性の比較分析」（発表・河合貞子氏、

報告・広島大学大学院 福光由布氏)。シンポジウム「芸術は闘えるか?」(基調講演・御庄博実氏、司会・菅村亨氏、パネリスト・竹澤雄三氏、池田正彦氏、高石勝氏、報告・広島中央郵便局 大山智徳氏)。

袁葉氏が「輝け! ドキュメンタリー」と題するエッセイを寄せた。最終ページには第七十二回例会案内を掲載した。

▼平成十七年十月一日(土)

広島市立大学芸術学部で開催されていた「広島市立大学・ニュルンベルク美術大学アートプロジェクト—KHORA—」に参加させていただく形で第七十二回例会を開催した。大学の内外に展示されている作品を同大学大学院の学生さんたちに案内していただいた後、シンポジウム「ドイツ、日本における芸術と教育の現況」に参加。パネリストは広島市立大学芸術学部長 大井健次氏、ニュルンベルク美術大学副学長 クラウス・ブーニー氏、広島市立大学大学院芸術学研究科助教授 関村誠氏、広島市現代美術館副館長 竹澤雄三氏、広島県立美術館主任学芸員 松田弘氏およびプロジェクト参加者。

この日の最後のプログラムで、同大学ロビーで開催された「上野眞樹ヴァイオリンミニコンサート」を鑑賞して、例会は終了した。参加者は十七名。

▼平成十七年十二月一日(木)

会報第八十五号を発行。巻頭言は比治山大学現代文化学部・高石勝氏の「お客様という人種」。第七十二回例会報告は「夏の大塚の展覧会」と題して広島市立大学芸術学部協力研究員の木村東吾氏がアートプロジェクト「KHORA」について執筆。シンポジウム「ドイツ、日本における芸術と教育の現況」の報告は同大学芸術学部の藤代茂展氏に書いていただいた。最後の「上野眞樹ヴァイオリンミニコンサート」については、詩人の井野口慧子氏が報告した。前号に引き続き袁葉氏がエッセイ「『にがい涙の大地から』を観て」を寄稿した。最終ページには第回73例会案内を掲載した。

▼平成十七年十二月十七日(土)

第七十三回例会を広島市金屋町にある「ワークピア広島」で開催した。一つ目の発表は広島大学総合科学部助教授、桑島秀樹氏による「アイルランドにおける美と信仰のかたち」。アイルランド的感性文化の有様を、「グロテスク」ないしは「崇高」といった概念を引きつつ、スケッチ風に論じた。

二つ目の発表はマイセン磁器の研究者として知られる嶋屋節子広島大学名誉教授による「マイセン磁器発明者は誰か?」。「実業家でもあり学者でもあったチルンハウスがドレスデンの実験場で、磁器を製造することに成功したものの、直後に赤痢で死亡し、その後ペ

ットガーが商品化に成功した」という見解を、豊富な資料と共に発表した。参加者は二十五名。

▼平成十八年二月五日（日）

会報第八十六号を発行。巻頭言は福山市立女子短期大学・柴川敏之氏の「アートと相撲のコラボレーション」。第七十三回例会報告①「アイルランドにおける美の信仰のかたち―グロテスクと崇高―」（発表・桑島秀樹氏、報告・広島大学大学院 長迫英倫氏）②「マイセン磁器発明者は誰か？」（発表・嶋屋節子氏、報告・広島大学大学院 尹芝恵氏）。広島大学の能登原由美氏が「アートと社会の架け橋を目指して」と題する投稿を寄せた。最終ページには第七十四回例会案内を掲載した。

▼平成十八年二月十八日（土）

第七十四回例会をひろしま美術研究所で開催した。研究発表の一つ目は、広島大学大学院 尾形太郎氏の『ドキュマン』におけるバタイユのイマージュ論」。雑誌『ドキュマン』（1929～30）に掲載のバタイユの記事と、それに添えられた写真の分析を通して、バタイユにおける「反イデアリズム的形態論」と言えるものを論じた。

二つ目の発表は、広島市立大学・関村誠氏の「プラトンが見た人形と影」。一般に哲学の始まりとされている「驚き」を表すタウマというギリシャ語が「人形」をも意味することを踏まえた上で、「人形と影」を見ることからプラトンの思想的営みが始まったのではないかとする、新たなプラトン解釈の可能性を示した。参加者は二十二名。

▼平成十八年四月十五日（土）

会報第八十七号を発行。巻頭言は広島大学大学院を卒業後、現在は長崎県美術館で学芸員として働いている森園敦氏が「西の国から'69」を寄せた。続いて第七十四回例会報告①「雑誌『ドキュマン』におけるG・バタイユの形態論」（発表・尾形太郎氏、報告・広島大学大学院 川口佳子氏）②「プラトンが見た人形と影」（発表・関村誠氏、報告・広島市立大学大学院 米倉大五郎氏）。当学会代表委員の金田晉氏が「『藝術学関連学会連合』に関する報告」を寄せた。最終ページには第七十五回例会案内を掲載した。

▼平成十八年五月十三日（土）

第七十五回例会を開催。今回は毎年恒例の野外例会で、広島県三次市にオープンしたばかりの二つの美術館「奥田元宋・小由女美術館」と「はらみちを美術館」そして「みよし風土記の丘・広島県立歴史民俗資料館」を訪れた。

生憎の雨だったが、例年通りマイクロバスで午前九時に広島駅を出発、最初の目的地「奥田元宋・小由女美術館」に十時五十分に到着した。

同美術館では「響き合う二つの芸術～奥田元宋と奥田小由女」と題して、開館記念特別展が開催されていた。見学に先立ち、同館の松原学芸員から、今回は所蔵作品だけでなく他の美術館などから借りた作品も含めて全１１５点におよぶ大規模な展覧会であること、全国でも珍しい夫婦の美術館であること、満月の夜には午後十時まで開館していることなどの説明を受けた。

第一室には「盲女と花」など、元宋氏の若い頃の作品が展示されていた。見学の途中、突然館内放送があり、ロビーで日野原重明氏、奥田小由女氏、三次市長のトークがあるという。思いがけないプレゼントをもらった気分で、大急ぎで参加する。

小由女氏の若い頃の作品は白一色だが、元宋氏と結婚したころから、鮮やかな色を使うようになっていた。元宋氏と共同制作した作品「春陽清韻」も展示されていた。第三室では、元宋氏の門外不出の雄大な作品、銀閣寺襖絵「山霊重畳」に圧倒された。

次の訪問地は「みよし風土記の丘・広島県立歴史民俗資料館」。風土記の丘には県内最大級の古墳群があるが、雨天なので残念ながら見学は割愛、館内で学芸員の方から丁寧な説明を受けた。広島の原始・古代が展示されていて、自分たちのルーツに出会ったような懐かしく、不思議な感じがした。

最後の見学先は、資料館からバスで約三十分走った君田町にある「はらみちを美術館」。こじんまりとしているが、しゃれた建物だ。設計は当学会の中川公子会員の弟で山嵜雄二郎氏。かの有名な建築家・安藤忠雄氏のお弟子さんだそうだ。お隣の君田温泉でお土産を買って、一路広島へ。少々雨にはたたられたが、充実した一日だった。参加者は十七名。

《平成十八年六月三十日現在、法人会員四法人、個人会員二百二十五名（特別会員三名、一般会員百九十八名、学生会員二十四名）》

（こめかど・きみこ　広島芸術学会事務局）